



徳川家康の銅像(東京都墨田区)
鷹狩りの勇姿

先人と薬の話 その1 徳川家康と八味地黄丸

徳川家康は1543年、三河(現・愛知県)で生まれた。1600年関ヶ原の戦いで石田三成を破り、1603年江戸幕府を開いて、大坂の陣で豊臣氏を滅ぼした翌年、1616年74歳で亡くなった。死後は「東照大権現」として、各地に祀られている。

家康は戦国時代を代表とする戦略家であったが、心身の鍛錬と摂食に努めたため、病気にかかることはまれであった。遊泳の習慣もあり、年老いても自ら川に飛び込み、遊泳を楽しんでいたという。また、鷹狩りを好んでおり、暇さえあれば必ず行っている。食事面では、粗衣粗食を心がけ、麦飯を常食し、味噌を好んでいた。

家康は健康オタクといわれるほど体に気を使っていたため、医薬に強い関心を持ち、薬も自ら調合していた。静岡県にある久能山東照宮には、家康が使った薬箱や薬研(やげん)がある。家臣が病気になるたびに、自分で調合した薬を分け与えたという。また、贈答品としても用いていた。

家康が調合していた薬は数々あるが、このほか愛用していた常備薬に八味地黄丸(はちみじおうがん)がある。専用の薬箱の8段目に保管していたといわれる。これはこの漢方が俗に「八の字」と呼ばれていたことから、この頭文字の八になぞらえ、わかりやすい8段目の引き出しにしまっていたようだ。八味地黄丸は、疲れやすい、手足の冷え、ほてり、腰痛、尿量減少、夜間の頻尿、かすみ目、口渇などの症状がある人に使われ、腎機能を助ける効果がある。なお、成分は、地黄、山茱萸(サンシュユ)、山薬(サンヤク)、沢瀉(タクシヤ)、茯苓(フクリョウ)、牡丹皮(ポタンピ)などで構成されている。

参考図書 宮本義己：『戦国武将の健康法』新人物往来社、篠田達明：『戦国武将の死生観』新潮社



土方歳三の像(東京都日野市)

先人と薬の話 その2 土方歳三と石田散薬

土方歳三は、一八三五年武蔵国多摩郡石田村(現在の東京都日野市)に農家の子として生まれた。

十七歳のとき、二度目の奉公に失敗した歳三は、実家に戻って石田散薬の行商を兄に命じられた。武士を夢見ていた歳三は、行商に出るときには剣術の道具を携え、道場を見つけては試合を申し込んだという。

石田散薬は土方家に代々伝えられたもので、日本全土の水辺に自生する野草であるミソソバという植物を原料としている。挫骨、打ち身切り傷、腕・腰の痛みなどに効果があるとうたわれていた。製法は、まず刈り取ったミソソバを天日で乾燥させる。これを黒焼きにして鉄鍋に入れた後、酒を適量散布して鍋から取り出す。

ふたたび乾燥させて、薬研にかけて粉末にしたものが石田散薬である。これを大人は一日一包を煙酒一合に入れて混合し、一回で服用する。石田散薬は、一九二九年までは加工、販売されていたが、第二次世界大戦後に薬事法が改正され、製造販売の許可を申請したが、成分分析の結果、薬とは認められず、いつの間にか製造は中止されてしまったという。

さて、その後の歳三は、二五歳のときに天然理心流に正式入門を果たす。そこで近藤勇と出会い、新選組の前身である浪人組に配属される。浪人組は京都に行き、八月十八日の政変を機に「新選組」の隊名を幕府から拝命される。歳三は新選組の副長として活躍し、倒幕を企てる武士から恐れられる存在までになった。しかし、徳川慶喜の大政奉還により新選組は旧幕府軍として明治新政府軍とたたかうことになる。その最後のたたかいとなった五稜郭の決戦で歳三は戦死する。享年三五歳。

参考図書 土方愛：『子孫が語る土方歳三』新人物往来社、菊池明：『クロニクル土方歳三の35年』新人物往来社、菊池明：『土方歳三遺聞』新人物往来社



水戸黄門(徳川光圀)の像(茨城県水戸市)
両わきに立つのは助さん、格さん

先人と薬の話 その3 徳川光圀と救民妙薬

徳川光圀は一六二八年、水戸城下(現在の茨城県水戸市)で生まれた。江戸時代初期の人物で、水戸黄門で知られる光圀は江戸幕府を開いた徳川家康の孫にあたり、御三家である水戸藩の第二代藩主である。

光圀は藩主としてさまざまな事業を展開した。なかでも有名なのは『大日本史』の編さんである。神武天皇から後小松天皇までの歴史書で、光圀の命により、一六五七年に着手した。光圀死後も編さんは続けられ、『大日本史』が完成するのは一九〇六年で、実に二五〇年の時間を費やすことになる。

また光圀は、水戸藩が財政難であったこと、さらに農民も貧しかったため、さまざまな改革を行った。その一つが一六九三年、藩医に命じて作らせた漢方書である。この漢方書は「救民妙薬」と呼ばれ、村々に配布された。医師がいなく、薬が入手できない人のために、簡易な自家療法を教えたもので、三九七種類の製法が掲載されている。光圀自身も、藩邸内に薬室を設け、ここで丹薬、散薬、丸薬などを毎日作らせた。そして諸士をはじめ藩内の僧侶、水戸家出入りの者などに求めに応じて薬を与えていたという。さらに、名鍼医を待医とするなど、医学にも熱心に取り組んでいた。

水戸藩の礎を築いた光圀は、一七〇〇年、七三歳の生涯を終え、諡(おくりな)を「義公」と定められた。

参考図書 鈴木暎一：『人物叢書 新装版 徳川光圀』吉川弘文館
名越時正：『新版 水戸光圀』水戸史学会
野口武彦：『徳川光圀』朝日新聞社